



洗足学園音楽大学

大学院弦楽器
コンチェルト研究
演奏会

2021.
2/20 SAT.

シルバーマウンテン2F

午前の部

11:30開演 (11:00開場)

午後の部

17:00開演 (16:30開場)





1. J.C.バッハ/ヴィオラ協奏曲より 第1楽章

ソリスト：ZHANG WEICHEN(大学院1年生)

この協奏曲は、J.C.バッハによって1947年に出版された。この作品の旋律はシンプルかつ流麗。構造は厳格で、ありながら斬新。特筆すべきは弦楽器の2声部による旋律で、巧みに作曲され、非の打ち所がない。同時にこの作品はヴィオラの美しい音色を存分に味わうことができ、ヴィオラの演奏技巧がバッハの生きた時代には既に高い水準に達していたことがうかがえる。

この協奏曲は、バロック時代に多く用いられた三楽章形式(急-緩-急)で書かれている。また、この曲は様々な場面で、バロック初期の協奏曲の典型例に挙げられる。このことから、この協奏曲が作品としても洗練されていることが分かる。今回は作品の第1楽章：Allegro molto ma maestoso 2/2拍子を演奏する。

2. K.シュターミッツ/ヴィオラ協奏曲より 第1楽章

ソリスト：有 福 佑 依(大学院2年生)

カール・シュターミッツ(1745～1801)はマンハイムで生まれる。18世紀後半に生きたヴァイオリン奏者・ヴィオラ奏者・作曲家で、主にパリで活躍し、ハイドンやモーツァルトと同時代を生きた。父、ヨハン・シュターミッツはマンハイム楽派の創設者であり、弟のアントン・シュターミッツと共に、マンハイム宮廷楽団でヴァイオリン奏者として活躍した。

本作品は、初期のヴィオラ協奏曲の中でも非常に有名な作品だ。古典派ならではの華やかで優雅な音楽に、強弱が細かく指示され、旋律に重きを置き技巧的に書かれる等、マンハイム楽派の特徴が多くみられる。ピアノ協奏曲やヴァイオリン協奏曲などと比べると、有名曲が少ないヴィオラ協奏曲だが、その中でもよく知られているのがこの曲である。

3. J.ハイドン/チェロ協奏曲第1番より 第1楽章

ソリスト：友原 安 佐 子(大学院2年生)

ハイドンは、1761年からエステルハーゼ公爵家に仕えていた。公爵家の宮廷楽団でチェロ奏者として活躍していたJoseph Weiglのために、このコンチェルトは作曲された。バロックの痕跡を残すハイドンの初期の協奏曲を代表する作品である。この作品の存在は、ハイドン自身が記載した作品目録(“Entwurf-Katalog”)のみでしか知られていなかったが、チェコの音楽学者Oldrich Pulkertによって1961年に筆者譜が発見された。ハイドンの時代は、現在のオーケストラのような大きな編成ではなく、10～15人ほどの室内楽アンサンブルだった。ソリストは存在せず、ソロの部分はチェロパートのトップによるものか、あるいはチェロパートは一人だった可能性もあり、チェロの楽師がソロ部分を弾き、tutti部分はコントラバスが担当したのではないかと考えられている。

チェロ協奏曲ハ長調が作曲された1760年代前半の作品には、現在わかっているもので、ヴァイオリン協奏曲ハ長調や、交響曲第6番《朝》、第7番《昼》、第8番《晩》がある。30年近く仕えたエステルハーゼ時代のハイドンは、宮廷内での週間定期コンサートや祝辞のために多くの楽曲を作曲した。



4. W.A.モーツァルト/ ヴァイオリン協奏曲第4番より 第1楽章 ソリスト：菅野稚子(大学院1年生)

W.A.モーツァルトは、1773年から1775年の若い頃に5曲あるヴァイオリン協奏曲を書いている。第4番は、第1楽章の冒頭主題の勇壮な軍隊のリズムから「軍隊的」とも名づけられることがある。オーケストラはヴァイオリン協奏曲第3番でみられたようなソロヴァイオリンとの対話、かけ合いなどはほとんどおこなわず、より単純な性格をもち、忠実な伴奏の役をつとめたり、重複して旋律を強めたりしている。

第1楽章は、軍隊的なリズムをもった力強い主題がオーケストラにより演奏され、ソロヴァイオリンによって繰り返し演奏されたあとは姿を現すことはない。ソロヴァイオリンの華やかな旋律に対して、オーケストラはわずかにかけ合いがある程度である。

5. M.ブルッフ/スコットランド幻想曲より 第2楽章 ソリスト：濱萌香(大学院1年生)

マックス・ブルッフは、ソプラノ歌手であった母から音楽の手ほどきを受けた。彼の作品の主流は合唱曲であるが、独奏楽器と管弦楽のための作品も重要な位置を占めている。スコットランド幻想曲はスコットランド民謡の旋律を用いて書かれた作品である。初演は1880年、この曲を献呈されたヴァイオリニスト、サラサーテの独奏によってハンブルクにおいて行われた。

第2楽章は、ブルッフ自身によって、この楽章をスケルツォ風の舞曲と述べている。オーケストラがfで導入部を奏で、ト長調に転調し、独奏ヴァイオリンが主題を奏でる。この主題は、スコットランド民謡《The Dusty Miller》をもとにしたもので、伴奏はスコットランドのバグパイプを模した五度のペダルポイントが使用されている。独奏ヴァイオリンによる自由で華麗な技巧部分が多彩に現れ、終盤ではアダージョ、変イ長調となり、次の楽章への期待を予感させて静かに流れ込んでいく。

6. J.ブラームス/ヴァイオリン協奏曲より 第1楽章 ソリスト：北川乃梨子(大学院2年生)

ロマン派の大作曲家であるブラームスは、様々な分野で素晴らしい名曲を多く残しているが、ヴァイオリン協奏曲というジャンルではこの作品77だけを残している。そしてこの協奏曲は、ブラームスの数ある傑作の1つであると同時に、ベートーヴェンやメンデルスゾーンのものと同様に三大協奏曲と呼ばれ、現在もヴァイオリニストのレパートリーとして広く愛されている。

第1楽章 Allegro non troppo 4分の3拍子 ソナタ形式 冒頭はヴィオラ、チェロ、ファゴットのゆったりとした第一主題で牧歌風に始まる。楽章全体は、この第1主題に沿って様々な表情を与えられながら進んでゆく。カデンツァはヨーゼフ・ヨアヒムのものを演奏する。



7. J.ブラームス/ヴァイオリン協奏曲より 第3楽章

ソリスト：林桃子(大学院2年生)

J.ブラームスは、1833年にドイツのハンブルクに生まれ、あらゆる分野ですぐれた数々の名曲を残した大作曲家である。

ヴァイオリン協奏曲は、1878年にベルチャッハで作曲されたが、この時期は特にブラームスの作曲活動が盛んである。この協奏曲の作曲に大きな影響を与えたのが、ブラームスと長年に渡って親交のあった、ヴァイオリニストであるヨーゼフ・ヨアヒムである。

ブラームスは演奏技巧的な面で、ヨアヒムに多くの助言を求め、ヨアヒムは第1楽章のカデンツァも作曲している。初演は1879年1月1日にライプツィヒで、ヨアヒムの独奏、ブラームスの指揮で行われた。ソロヴァイオリンとオーケストラがうまく融合した、「交響曲風」協奏曲である。

第3楽章は、ロンド・ソナタ形式で書かれており、この楽章の主題は、ハンガリーのロマ風の色彩を持ち、ヨアヒムが作曲した《ハンガリー調の協奏曲》の影響があるとされている。軽快でユーモラスであり、開放的、また情熱的な楽章である。



1. E.エルガー/チェロ協奏曲より 第4楽章

ソリスト：有馬 憧(大学院1年生)

このチェロ協奏曲は、イギリスの作曲家、指揮者であるエドワード・エルガー（1857-1934）によって1918年に作曲された。第一次世界大戦が1914~1918年なので、戦争が終わった直後の作品である。大戦中は、身体的・精神的に病み、しばらくの間作曲に専念することができなかったが、戦争が終結に向かうと、健康こそ損ねていたものの一気に4つの大規模作品を書き上げた。その一つがこのチェロ協奏曲である。初演は、1919年10月にエルガー自身の指揮でソリストにフェリックス・サルモンドを迎えて、ロンドン交響楽団により行われたが、極端にリハーサルの時間が短かったため、作品を完成させるまでに至らず、聴衆からの評価はあまり芳しくなかった。同年、ペアトリス・ハリソンがソリストを務めた再演が成功したことで、徐々に正当な評価を得ていき、今日ではチェロ協奏曲の代表的な曲の一つとなっている。

今回演奏する第4楽章は、第1~3楽章の要素を統合したフィナーレで、軽やかな音楽が流れた後、後半ではテンポを落とし、終盤では第3楽章の主題も再現する。コーダでは第1楽章の再現がなされ激烈に終わる。

2. H.ヴィエニャフスキ/

ヴァイオリン協奏曲第2番より 第1楽章

ソリスト：木村 蒼(大学院2年生)

ヴァイオリン協奏曲第2番ニ短調は、ヴィエニャフスキの最高傑作であるとともに、ロマン派時代を代表するヴァイオリン協奏曲の傑作の一つである。当代最高のヴィルトゥオーソとして活躍したヴィエニャフスキらしく、華麗な技巧が盛り込まれているが、第1番の時のように、ありとあらゆるアクロバットの特殊技巧を散りばめるという方法は少し整理され、歌う楽器としてのヴァイオリンの表現力が生かされて、官能的かつ感動的な旋律と和声が残る作品となっている。この曲は、1860年からのロシア滞在中に作曲され、1862年11月27日にサンクトペテルブルクにおいて、アントン・ルビンシテインの指揮により、ヴィエニャフスキ自身によって初演された。1870年の出版譜において、親友のパブロ・デ・サラサーテへの献辞が書き込まれた。

第1楽章 アレグロ・モデラート ニ短調 4分の4拍子で、ソナタ形式で書かれている。重々しく不安な第1主題と、抒情的な第2主題があり、その両方の要素が、ヴァイオリンによって伸びやかに発展し、驚異的な装飾音を施されていく。

3. M.ラヴェル/ツイガース

ソリスト：高橋 沙織(大学院1年生)

《ツイガース》は、1924年、モーリス・ラヴェルによって作曲された。ラヴェルはフランスの作曲家で、その特徴ある様式や洗練された和声で、同時代の作曲家の中で卓越した地位を保ってきた。

《ツイガース》はフランス語でジブシーという意味で、ハンガリーのジブシー音楽を素材とした作品である。曲を書いた動機は、ヨーゼフ・ヨアヒムの孫娘で、当時ヨーロッパで名ヴァイオリニストとして活躍していたイエリー・ダラーニの演奏に感銘を受けたことにあった。まず独奏ヴァイオリンによる長いカデンツァで始まる。前半はG線上だけで奏されるが、後半は重音やハーモニックス、ピッツィカートなどの技巧を凝らした変奏部分になっている。長い独奏部分が終わると、ハーブの波のようなアルペジオが始まり、やがてヴァイオリンが主題を生き生きと演奏する。この主題はその後さまざまなパターンの変奏で現れ、最後は転調を重ねながら狂ったように頂点に達し、曲を閉じる。



4. J.スヴェンセン/ ヴァイオリンと管弦楽のためのロマンス 作品26 ソリスト：押見純代(大学院2年生)

ヨハン・スヴェンセン (1840-1911) は、3歳年下のグリーグと共にノルウェーを代表する作曲家でヴァイオリン奏者や指揮者としても活躍した。ヴァイオリンと管弦楽のためのロマンス 作品26は1881年に作曲され、彼の代表作として広く知られている。ト長調、四分の三拍子、三部形式。

太古の昔より氷河の浸食で形作られたフィヨルド。オーロラが夜空を彩る長い冬から、雪が融け、穏やかな春が訪れる。ノルウェーの大自然とゆったりとした時の流れを表すが如く、管弦楽が半音階でゆっくりと織り重なり、澄んだ響きを奏する。悠久の時を経て形作られた大地の上で、独奏ヴァイオリンにより情緒溢れる旋律が歌われる。

対照的に、中間部ではト短調へ転調した舞曲風のリズムに乗って次第に高揚し、情熱的なクライマックスを迎える。再び主題が歌われた後、清澄な響きと共に曲が閉じられる。北欧の風景と共に伝説やいにしえの出来事が語りかけられるようだ。

5. J.シベリウス/ヴァイオリン協奏曲より 第1楽章 ソリスト：山口亜純(大学院2年生)

《ヴァイオリン協奏曲 ニ短調 作品47》は、1903年から1904年、シベリウスが38歳の頃の作品である。若い頃にヴァイオリニストを志した程にヴァイオリンという楽器を知り尽くした彼が唯一残した協奏曲作品である。

この曲には、初稿版と改訂稿(現行版)がある。初稿版を印刷する前の小さな修正が細部に留まらず、変更が構造の基礎に触れたため、全体を大幅に書き換え、現行版へと改訂することとなった。初稿版から2年の月日を置いて1905年に完成した改訂版では、いくつかの超絶技巧的要素や音楽的モチーフを削除したものの、オーケストレーションにも変更を加え、より重厚なサウンドを作り上げている。幻想的な独創性と強く野生的な魅力の中に緻密さが際立つ、ヴァイオリンの魅力を最大限に引き出した間違いのない傑作である。今日では初稿版と現行版が一緒に収録された録音も発売されており、聴くことができる。また違ったシベリウスの音楽的モチーフや熱量を聴くことができ、大変興味深く、面白い。

6. J.シベリウス/ヴァイオリン協奏曲より 第3楽章 ソリスト：成田叶(大学院1年生)

1903年(シベリウス38歳の時)に作曲され1905年に改訂された。改訂版が今の現行版となっている、シベリウスが作曲した唯一の協奏曲作品。

第3楽章 Allegro ma non tanto ニ長調。エネルギーに満ちたロンド風のフィナーレ。2つの主題を持ち、ティンパニと弦楽器の刻む大地の鼓動のようなリズムに乗って、独奏ヴァイオリンがG線で力強く奏する第1主題と、民俗的な第2主題が交互に現れる。力強さが印象的で、ヴァイオリンの技巧を存分に発揮しつつ、大きな高揚を作り出していく。シベリウス自身はこの楽章を「死の舞踏」と呼んでいる。



7. D.ショスタコーヴィチ/
ヴァイオリン協奏曲第1番より カデンツァ、第4楽章
ソリスト：藤岡 瑞季(大学院2年生)

20世紀ロシアの作曲家ショスタコーヴィチは革命とその後の混乱の時代にあり、体制からの批判や圧力にさらされながらもそれに耐え、大作曲家としての地位を保った。

ヴァイオリン協奏曲第1番は、オイストラフとの交友から生まれた協奏曲である。1948年に完成されていたが、同年初頭よりジダーノフ批判が始まったため、すぐに初演されることはなかった。1953年のスターリンの死後発表した《交響曲第10番》が政府から歓迎され、その流れで、作曲から7年経った1955年に披献呈者のオイストラフとレニングラード国立フィルによって初演された。

緩急緩急の全4楽章からなる異例な構成で、ショスタコーヴィチのイニシャルである'DS (Es) CH'の音列が度々現れる。本日はカデンツァと第4楽章を演奏するが、長大なカデンツァは作曲家自身のモノローグである。「私はここにいる！」とばかりに「DSCHの動機」を演奏し、曲は休みなく第4楽章へ。第4楽章のブルレスケはユーモアと辛練さを兼ね備えた楽章である。一見イ長調（調号#3つ）のように聴こえるが、調号は書かれていない。アクロバットの演奏を繰り広げる。



指揮者紹介



吉田 行地
(指揮)

五歳より子供のための音楽教室に入る。音楽の手ほどきを萩原洋造、萩原房子両氏に受ける。十歳よりクラリネットを萩原定夫氏に師事。早稲田大学を経て、1991年洗足学園音楽大学付属指揮研究所入所。1996年同研究所修了。指揮を秋山和慶、河地良智、尾崎晋也、湯浅勇治の各氏に師事。ピアノ、スコアリーディングを島田玲子、小林万里子の両氏に師事。

これまで、ルーマニア国立サトゥ・マーレフィルハーモニーオーケストラ、ルーマニア国立トゥルグムレシュ交響楽団、札幌交響楽団、東京交響楽団、名古屋フィルハーモニー交響楽団、大阪フィルハーモニー交響楽団、広島交響楽団、九州交響楽団、大阪市音楽団、東京佼成ウインドオーケストラなどに客演。

2004-2010年にはNPO法人中部フィルハーモニー交響楽団の指揮者を務めた。

また、クラシックにとどまらず、劇団四季ミュージカルの指揮や、榎原敬之オーケストラ・コンサート「cELEBRATION」の指揮者等、多彩な音楽活動を行なっている。

日本大学芸術学部客員教授
洗足学園音楽大学
桐朋学園大学非常勤講師



有福 佑依
(Viola)

ヴァイオリンを故・益子絢子、本多菜穂子、堀越みち子、沼田園子の各氏に師事。また、ヴィオラを古川原裕仁、須田祥子の各氏に師事。リチャード・ディーキン、オレグ・クリサ、ヴィルフリート・シュトレレの各氏が来日時、特別レッスンを受講。

第7回、8回音楽大学オーケストラ・フェスティバルやラ・フォル・ジュルネ東京、学内において、室内楽演奏オーディション合格者による披露演奏会出演。



押見 純代
(Violin)

愛知県出身。洗足学園音楽大学卒業。

音楽物語制作と社会貢献音楽活動により東久邇宮記念賞、東久邇宮文化褒賞を受賞。

ヴァイオリンを小林すぎ野、Ray Chang、西尾ヨシ子、廣岡克隆、室内楽をJan Loeffler、川田知子、羽川真介、ヴィオラを安藤裕子、ピアノを山本緑各氏に師事。

保育・福祉施設、病院、観光施設等のコンサート企画と演奏、およびクラシック音楽や世界の様々な音色を用いた音楽物語の創作と物語コンサートの企画開催を行っている。



北川 乃梨子
(Violin)

4歳よりヴァイオリンを始める。

洗足学園音楽大学弦楽器コース卒業。

第21回、22回洗足学園音楽大学室内楽オーディション合格者による演奏会に出演。学内のオーディションにて、準セレクションチームに選抜され、室内楽演奏会に出演。

ザルツブルク＝モーツァルト国際室内楽コンクール2020 in Tokyoに弦楽四重奏で参加し、奨励賞受賞。

これまでにヴァイオリンを坂口真紀、水野佐知香の両氏に師事。

Profile



木村 蒼
(Violin)

栃木県出身。12歳からヴァイオリンを始める。
宇都宮短期大学附属高等学校音楽科を経て、洗足学園音楽大学弦楽器コースを卒業。オレグ・クリサ、フェデリコ・アゴスティーニの各氏に来日時に特別レッスンを受講。
これまでにヴァイオリンを川沼 文夫、星野 和夫、水野 佐知香の各氏に指事。
ヴィオラを大野 かおる、古川原 裕仁、安藤 裕子の各氏に師事。
室内楽を水野 佐知香、羽川 真介、大野 かおるの各氏に師事。



友原 安佐子
(Violincello)

鹿児島出身。
鹿児島短期大学(現鹿児島国際大学)音楽科首席卒業(ピアノ専攻)。
洗足学園アンサンブルアカデミーコースを経て、洗足学園音楽大学弦楽器コースチェロ専攻卒業。
オタワ国際音楽コンクール声楽部門(ソプラノ)金賞受賞。
チェロを木越洋、銅銀久弥、小澤豊の各氏に、室内楽を川田知子、羽川真介の各氏に師事。
目黒区、世田谷区を中心に、子育てサロン、保育園等で演奏活動を行っている。



林 桃子
(Violin)

神奈川県出身。
洗足学園中学高等学校卒業。洗足学園音楽大学弦楽器コースヴァイオリン専攻卒業。
在学中、前田記念奨学金を授与される。また、学内の数々のマスタークラスを受講。
第31回全日本ジュニアクラシックコンクール第4位。
これまでにヴァイオリンを堀越みちこ、渡邊ゆづき、ヴィオラを古川原裕仁、安藤裕子、室内楽を安永徹、市野あゆみ、羽川真介、古川原裕仁、大野かおる、川原千真の各氏に師事。

Profile

大学院 1年生



有馬 憧
(Violincello)

福島県出身。

15歳よりチェロを始める。福島県立橘高等学校、国立大学法人福島大学人間発達文化学類卒業。

チェロを金谷昌治、金木博幸の各氏に、室内楽を須田祥子氏に師事。

またアーロン四重奏団のChristophe Pantillon氏に指導を受ける。これまでに秋吉台室内楽セミナー、飛騨室内楽セミナーを受講。



菅野 稚子
(Violin)

千葉県出身。

11歳よりヴァイオリンを始める。洗足学園音楽大学弦楽器コースヴァイオリン専攻卒業。

フェデリコ・アゴ스티ーニ氏の来校時に特別レッスンを受講。

これまでにヴァイオリンを磯恒男、水野佐知香の各氏に、ヴィオラを安藤裕子氏に、室内楽を物集女純子、須田祥子、安藤裕子の各氏に師事。



高橋 沙織
(Violin)

宮城県出身。

3歳よりヴァイオリンを始める。

2014年第24回日本クラシック音楽コンクール全国大会高校の部第5位。

2018年宮城県芸術協会音楽コンクールヴァイオリン部門第2位及び宮城県教育委員会教育長賞受賞。

これまでにヴァイオリンを荒井正昭、川田知子、安永徹、水野佐知香の各氏に、室内楽を安藤裕子、川田知子、須田祥子、安永徹、市野あゆみの各氏に師事。

Profile



張偉琛 (チョウ・イチン)

中国北京市生まれ、中国伝媒大学音楽学部電子音楽作曲科卒業。
5歳からヴァイオリンを学び、10歳から北京少年金帆交響楽団に第一ヴァイオリン奏者として参加。

2008年ウィーンにおいて開催された国際青年交響楽団コンクールにおいて金賞を受賞した。

高校時代にヴィオラ演奏を学び、大学時代にヴィオラ奏者として中国伝媒大学交響楽団のリハーサルや公演活動に参加した。

ZHANG WEICHEN
(Viola)



成田 叶
(Violin)

東京都出身。

上野学園大学音楽学部演奏家コース卒業。第34回かながわ音楽コンクール入選。

第7回Kアンリミテッド音楽コンクール奨励賞。

東京国際芸術協会より助成を受け、チューリッヒ芸術大学教授によるマスタークラスへ参加。

ソリストとして、清水醜輝指揮、上野学園大学管弦楽団と共演。これまでに関口敦子、本郷幸子、矢部達哉、緒方恵、水野佐知香の各氏に師事。



瀨 萌香
(Violin)

長野県出身。

洗足学園音楽大学弦楽器コースヴァイオリン専攻卒業。

3歳よりヴァイオリンを始める。

これまでにヴァイオリンを青木千枝子、矢口十詩子、北原よし子、千葉純子、ヴィオラを古川原裕仁、室内楽を川田知子、須田祥子の各氏に師事。

現在、洗足学園音楽大学大学院1年に在学中。



水野 佐知香
(弦楽器コース 主任教授)

東京藝術大学卒業。
第44回日本音楽コンクール第1位、レウカディア賞受賞。
第21回海外派遣コンクール松下賞受賞。
第7回ヴェニアフスキー国際コンクール入賞。
第15回民音コンクール室内楽の部第1位。
在学中より活発な演奏活動を開始。国内外の主要なオーケストラとの共演はもとより、テレビ、ラジオなどの音楽番組に出演。
一方、邦人作曲家の作品や、各ジャンルの著名アーティストとの共演レコーディングも数多く、近・現代音楽への造詣も深い。充実したソロ活動を続ける傍ら、アンサンブルや教育活動にも情熱を傾け、各地での公開レッスンまた全日本学生音楽コンクールやかながわ音楽コンクール等各地の音楽コンクールの審査員を務め、多くの逸材を育てている。
現在、洗足学園音楽大学教授、弦楽合奏団ヴィルトゥオーゾ横浜代表。



羽川 真介
(弦楽器コース 講師)

東京藝術大学を経て東京藝術大学大学院修了。
Pacific Music Festival参加。学内にて「モーニングコンサート」に選ばれ、藝大フィルハーモニアと共演。
練馬新人演奏会にて優秀賞受賞。
オーストリアのグラーツでおこなわれたIMPULUS現代音楽祭に招待参加。
2002年より藝大フィルハーモニア管弦楽団において首席奏者を務める。
2001年～2003年国立音楽大学非常勤講師。洗足音楽大学非常勤講師。
アンサンブルコルディエ、アンサンブルofトウキョウメンバー。
東京フィルハーモニー交響楽団、東京交響楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団などに客演首席奏者として招かれている。



西川 真理子
(ピアノコース 講師)

洗足学園音楽大学、ミュンヘン国立音大ピアノ科及び同大学院室内楽科卒業。

読売新人演奏会出演。

ドイツバイエルン放送、NHK・FM放送出演。ドイツおよび日本国内にてソロリサイタル、室内楽、歌曲・合唱伴奏の他、演劇とのコラボ演奏などで活躍。

ピアノを清田千寿子、M・エッガー、G・ピルナー、M・シェーフアー、室内楽をA・ヴォルコフに師事。洗足学園音楽大学講師。日本ピアノ教育連盟会員、ピティナ正会員。

Profile

電子オルガンコース



赤塚 博美

(電子オルガンコース 統括教授)

学生時代よりエレクトーンコンクール国際大会などで、数々の音楽賞を受賞。

オペラ伴奏者としての活動を始めてからは、ミラノスカラ座のG・ピサーニ氏に学び数々のコンサートで共演。

ソリスト、現代曲の初演、オペラ伴奏などでエレクトーン演奏の第一人者として国内外を問わず活躍中。繊細な音楽のニュアンスまでをも表現できる数少ないエレクトーン演奏家として、多方面で活躍を期待されている。

国際的フルート奏者の工藤重典氏と共演し、電子オルガンの可能性を引き出す演奏に絶賛され、繊細な音楽のニュアンスまでをも表現できる数少ないエレクトーン演奏家として、多方面で活躍を期待されている。

編曲、演奏を担当したCD“Message for You”を水野佐知香氏、神谷百子氏と共にリリース、好評を博す。

現在、洗足学園音楽大学・大学院電子オルガンコース統括教授。



大熊 美子
(賛助出演)

静岡県出身。

日本大学三島高等学校を経て、洗足学園音楽大学電子オルガンコースを首席で卒業。

これまでに電子オルガンを宇津木直美、岩崎孝昭の各氏に、ピアノを鳥羽瀬宗一郎氏に師事。

現在は、洗足学園音楽大学電子オルガンコースの助手として勤務している。

Profile



CHEN YUJIN
(大学院2年生)

陳 昱瑾

中国出身。中国西安音楽大学園卒業。

2016年7月来日後、2018エレクトーンフェスティバルアンサンブルコンテスト銀賞を受賞。

電子オルガンを譚艺民、大木裕 一郎、高田和泉、加曾利康之の各氏に師事。



YAN YANGBING
(大学院1年生)

閔 楊冰

中国陕西省西安市出身。4歳からクラシックピアノを学ぶ。

高校入学後、電子オルガンを習い始める。

2014年9月 西安音楽学園、現代音楽学園学科 電子オルガン専攻入学。

2018年6月に大学を卒業後、2020年4月洗足学園音楽大学院入学。現在大学院1年在学中。



WANG QINGZI
(大学院1年生)

王 慶子(オウ ケイコ)

中国浙江省出身。

浙江音楽学院流行音楽コース電子オルガン専攻を卒業後、2019年7月に来日。

4歳からピアノ、10歳から電子オルガンを勉強する。

2018年第6回Ringway電子オルガン全国コンクール・クラシック部門第7位。

2018年Ringway電子オルガン浙江音楽学院第1位。

浙江省第1回アカペラコンクール第1位。

任雪菲、高田和泉、岩崎孝昭の各氏に師事。

Profile



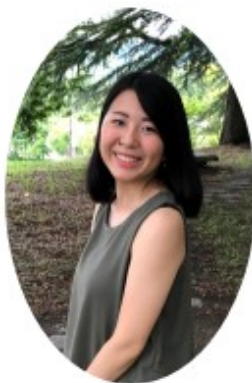
XU HUAMIN
(大学院1年生)

徐华敏
中国広西自治区南寧市出身。
広西芸術学院卒業。
来日後、大木裕一郎、赤塚博美、加曾利康之の各氏に師事。



DENG RUOHENG
(大学院1年生)

邓若珩
中国広東省出身。広東省星海音楽学院大学を2019年に卒業。
2016年APEKA (Asian-Pacific Electronic Keyboard Association) International Competition in Tryout、Modern Music Group、Adult Classにて一等賞。
2017年Yamaha Electone Scholarshipにて優秀賞を受賞。
2020年APEKA International Competition in Tryout、Classical Group、Adult Classにて一等賞ならびに最佳編曲賞を受賞。
現在は洗足学園音楽大学院電子オルガンコースで、赤塚博美、高田和泉の両氏に師事。



乗松 夏葉
(学部4年生)

千葉県出身。
2018年度前田記念奨学金を授与される。
第7回アマビレ電子オルガンコンテスト課題曲部門で銅賞を受賞。
これまでにエレクトーンを太田七重、小川真澄、岩崎孝昭の各氏に師事。

Profile



松下 紗弓
(学部4年生)

長野県安曇野市出身。
長野県小諸高等学校音楽科電子オルガン専攻卒業。
これまでに赤塚博美、米山恵美、白鳥絵菜の各氏に師事。
現在、洗足学園音楽大学電子オルガンコース4年在学中。



三田 侑花
(学部3年生)

千葉県船橋市出身。
2歳からヤマハ音楽教室に通い始める。
聖徳大学付属女子高等学校音楽科卒業。
現在、洗足学園音楽大学電子オルガン専攻3年在学中。
これまでに電子オルガンを松原麻美、近江君枝、小川真澄、各氏に師事。ピアノを渡部有子氏に師事。



内海 菜々美
(学部2年生)

横浜市出身。
2歳よりヤマハ音楽教室に通う。
電子オルガンを岩崎孝昭、笹山由紀子の各氏に師事。
ピアノを浦壁信二氏に師事。
現在、洗足学園音楽大学電子オルガンコース2年在学中。

Profile

電子オルガンコース



堀田 真菜
(学部2年生)

大分県出身。
大分県立芸術緑丘高校作曲専攻卒業。
これまでに、作曲を河野敦郎氏、遠藤信一氏、エレクトーンを
赤塚博美氏、山田奈津紀氏に師事。
現在、洗足学園音楽大学学部2年、電子オルガンコース在学中。



午前の部

Violin

押見 純代、木村 蒼、高橋 沙織、成田 叶、藤岡 瑞季、
山口 亜純、池原 志穂、佐藤クレメンツ アリス しの、
篠崎 愛、水野 佐知香(教授)

Viola

大森 陸 リチャード、加藤 可奈子、米倉 海陽

Violincello

有馬 憧、蛭原 一智、原 美月、羽川 真介(講師)

Contrabass

吉田 智海、嶋野 晴斗

午後の部

Violin

菅野 稚子、北川 乃梨子、濱 萌香、林 桃子、池原 志穂、
佐藤クレメンツ アリス しの、篠崎 愛、米倉 海陽

Viola

有福 佑依、ZHANG WEICHEN、加藤 可奈子

Violincello

友原 安佐子、森 義丸、原 美月、羽川 真介(講師)

Contrabass

吉田 智海、嶋野 晴斗

運営Staff

音響：齋藤 粹生

ステージマネージャー：萩庭 光 鈴木 研吾

アカデミックコーディネーター：横山 仁一